

Newsletter

November 2009

<http://www.aack.or.jp>

目次

追悼	パッカーネパリー・川喜田二郎氏を偲ぶ	1	
学者、思想家、行動者、川喜田二郎	高山龍三	1	
川喜田二郎さんのことIIボケのたわごと	並河 治	4	
求道者 川喜田二郎さん	酒井敏明	7	
アンナプルナ周遊トレッキングとチュルルーウエスト峰	安田隆彦	10	
長白山 時空を越えた旅	栗田靖之	17	
川田邦夫、横山宏太郎両氏に「雪氷功労賞」	川田邦夫先生(富山大学名誉教授)の紹介	飯田 肇	21
横山宏太郎氏の紹介	佐藤和秀	22	
日本山岳協会・山岳共済の担当交代のお知らせ		23	
AAACK海外登山・探検助成制度の案内		23	
会員動向		24	
編集後記		24	

追悼 パッカーネパリー・川喜田二郎氏を偲ぶ

学者、思想家、行動者、川喜田二郎

高山龍三

二〇〇九年七月五日、川喜田二郎先生の危篤の報を受けて、病室に駆けつけた。水蒸気と酸素の吸入を受けて、激しく呼吸をしておられるものの、一時間ほど側にいたが、目をあけてはもらえなかった。その年の早春に自宅へお見舞いに行ったときは、一人で二階から降りてこられ、奥さんの手製の特製スープを召しあがるようになったためか、体重も増え、顔もふっくらされて、一安心していたのに。耳が聞こえにくいだけで、お話もでき、出されたカステラの一切れも全部めしあがったのに。一昨年来、何度か入院を繰り返され、とうとう今度の入院では奇跡は起こらなかった。

先生の死去と「お別れの会」のお知らせを伝えるため、民博に梅棹忠夫先生を訪ねた。川喜田先生については「頑固やった」と一言。これも再度確かめたが、二人は京一中に同

時に入学、もともと梅棹先生は四修で三高へ、一年遅れて川喜田先生も三高へ、しかし梅棹先生の落第でいっしょになった。その後また二人そろって落第、それほど山登り、探検に熱中していた青春であった。今西錦司先生との出会いを尋ねると、川喜田先生は「兄弟子や、皆を紹介してくれた」といわれた。今西先生との個人的な出会いは、偶然であった。一中卒業前、ある日バスでなかに会い、「地図のない頭中山に行く」と思っています」というと、「俺も行く」といっしょに北山へ行ったという。家も近くであり、よく酒の席につきあわされたという。

「今西一家」といわれる人たちの間で、学際的な刺激が多かった。彼らの住まいも左京区の一画に集まっていた。「日本雑学派」と称して、するこ屋の二階に集まっていたという。謀議を立ちあげる、いわゆる「探検サロン」である。今西先生は「皆が俺を買いにきた」と述懐している。山岳探検の同志は、いろんな学問分野、それもフィールドワークのできる学問に分散していった。彼らは、共同調査、研究、討議を通じて、日



西北ネパール学術探検隊 ポカラにて、1958年（後列左から4人目川喜田隊長、6人目並河、7人目曾根原、前列左から3人目高山各隊員）。



帰路出会った村人と川喜田隊長。トゥジェ・ラ下キャンプ地にて、1958年。

本ではまれに見る学際的な世界をつくりあげた。川喜田先生はこういう人たちに囲まれ、刺激をうけ、共同で研究、行動して、その学問体系をつくっていった。彼の勉学、研究の場は、大学、研究室のみでなく、「野外」であり、「現場」であり、「仲間同志のつきあい」であった。

私と先生とのつきあいは、一九五一年、半世紀以上にさかのぼる。奈良県二階堂村（現天理市）の現地調査では、村人から聞き取ったデータを、図書カードに書いて提出した。

じつはこれはのちのKJ法につながる発端になるとは、そのとき思いもよらなかつた。すべての小さなカードの下には、とき、ところ、出所、採集者が記されている。三回生のときの演習で、小地域の地誌作成が求められ、これによって卒論調査、作成の予備練習となった。一つの仕事を達成することによっておこなうという教育であった。

一九五三年、先生は第一次マナスル登山隊の科学班に選ばれ、ネパール・ヒマラヤの探検に従事、中尾佐助先生とともに、キャンプ地八四、四カ月半に一五〇〇キロにおよぶ距

離を歩いた。『ヒマラヤ』を書いた徳岡孝夫氏命名の「科学弥次喜多道中」である。ただ歩くだけではない。広くエクステンシブ、広域的な調査と、チベット人村でのインテンシブ、集約的な調査、さらには今西先生から命じられた蝶の採集と、ロールシャハテストもこなすという、まさに超人的な調査をやりとげた。この住み込み調査でつきあつたチベット人との出会いは、その後のチベット研究の始まりともなった。またこのときの『民族学研究』誌に寄せた報告は、のちにKJ法になる方法で組み立てられた第一号となった。英文報告『ネパール・ヒマラヤの民族』は国際的にパイオニア的な評価を受けた。小学校以来の植物好き、三高理科出身の先生は、他の英文報告に「植生」と「作物帯」も担当、「著作集」（第一巻）で初訳された。『ネパール王国探検記』は科学的調査の一般向けの本のさきがけとなり、ベストセラーとなった。

先生にとつて最初のヒマラヤの最西奥地点の峠から見た西方の土地は、高冷乾燥のチベット高原を思わせる魅力ある土地だつた。約半世紀前、禅僧河口慧海が通つたトルポである。そのときはそこから引き返さざるをえなかつたが、そこを探検したい欲求は、五年後自らリーダーとなつて実現した。JSEN、西北ネパール学術探検隊である。ちょうど私が大学院の修士課程を終え、博士課程がまだ出来ていないときであつた。探検に参加しないかと誘われた。山に登つたこともない私がどうして選ばれたのか。民族地理学の調査協力者として、同じ大学関係者として、私が先

生からスキーを習ったから、国際地理学会議のときの手伝い、などいくつか考えられる。

登山や探検にまつたく縁のなかつた私の行動については、『鳥葬の国』に描かれているとおりである。ポーターのストライキに遇つて、本隊から離れて泊まったときは心細かつた。しかしあとであればリーダー教育だつたと先生はいう。隊のなかで、一番さきに高山病にやられた。しかしとてもゆつくりしたキャラバンの日程が、さいわいに高度順化をうまくやれて、もつとも高い峠はなんとか越えることができた。情報が乏しかつたことが、あえて未知の大地に踏み込み、いくつかの成果をあげることができた。

一九六四年に出た『パーティ学』という本がある。この本は本屋の料理コーナーに並んでいたという伝説もある。しかしこの本は先生のその後発展、展開する思想、行動の源になつた本である。文明論が出てくる。人間関係、組織論が発展する。そして根幹をなすものが野外科学の方法論であり、発想法が生まれるのである。それほど何もかも入つていた。『チームワーク』のモデル、素材となつたのは、五八年の探検隊員である。先生はあとで、このときのチームワークを会心の作とも言っている。リーダーとフォロワーのあり方、順番リーダー制、リーダーは地位でなく役割、毎日の打ち合わせ会議、六人チーム、順次指導制など、打ち出された。教育をしなから探検を続けるという、なんとも欲張つたやり方であつた。この隊はいくつかの大学の

混成部隊であつたが、仕事を一つ一つ達成しながら、チームワークを育てるといふ「創造愛」の仮説的理論が、ここから引き出された。

探検隊のいくつかの教訓は、移動大学で適用された。一九六九年、EEM、世界万国博民族資料調査収集団の一人として、西アジア、南アジアを廻つて帰つてきた私は、封鎖された大学を目の前にした。その年は講義もおこなわれなかつた。学長つるしあげの「団交」には、先生は声をつぶすまで学生と応酬を続けた。三〇〇人のヤジやシュプレヒコールに、二晩三日、一人で対抗し続けるという超人ぶりを示した。しかし同時に大学側および教授たちに対する批判もつのつていった。教授会から委任された声明文作成を、いつの間にか無視され、それに対する責任と、「参画社会を実現する会（参画会）」を中心に構想されていた移動大学の計画を実現すべく、東工大辞任を決意、機動隊導入決定と同時に辞表を提出した。

現代文明の直面する根本問題として、先生は早くから三つの公害を指摘した。一つはいわゆる公害、「環境公害」、第二は人の心が荒廃していく「精神公害」、第三は両者の中間にあつてどちらにも深く関わる「組織公害」、組織のなかで人間らしさを失い、組織の運用が柔軟にできなくなることである。これらに挑む決め手として、「参画社会を創れ」となり、足許からできる「移動大学」となつた。移動大学は「創造性開発と人間性解放」をめざし、「相互研鑽」、「研究則教育・教育則研究」、「頭から手までの全人教育」、大学間、大学と

社会の枠を取り払つた「異質の交流」、「生涯教育・生涯研究」、「地平線を開拓せよ」、そして「雲と水と」をスローガンに掲げた。この論理的でなく言いがたい情念をこめた最後のものは、もつとも批判もうけ、もつとも好まれもした。移動大学は二二回開催、日本列島を教科書として、全国をさまよひ、碇をおろした。先生の言によれば、「創造によつて愛が生まれ、その愛によつてまた新たな創造が生まれる」といふ「創造愛」の巨大なドラマティックな実験となつた。

大学辞任後、KJ法の正道な発展を図つて、川喜田研究所を設立、研究と研修をおこない、KJ法学会を創立、会員の相互交流、相互研鑽の場とした。一九六三―六四年の調査をまとめた英文報告『丘陵マガールとその隣人たち』に対し、秩父宮記念学術賞を受賞した。

先生は探検家、文化人類学者であるに留まらず、啓蒙思想家であり、なにより実践行動者であつた。一つは移動大学、もう一つは国際技術協力、地域開発、環境の問題である。ネパールを研究のフィールドとした先生は、西堀栄三郎先生らと日本ネパール文化協会（のち日本ネパール協会）を立ちあげた。留学生の受け入れ、皇太子（のちのビレンドラ国王）の留学、万博参加への協力、社団法人化、のち会長として会員一人一人の活動が協会の活動と、全員の参画を求めた。ネパール国王から二つの勲章、NASO賞を受賞した。ネパール山村の調査の結果、村民の要望をもとに、何をお返しできるか考え、『海外協

力の哲学」を世に問い、一種のアクション・リサーチとしての協力を位置づけた。予備テストののち、自ら現地を訪れ、シーカ谷五か村のP&R、パイプラインおよびロープライン計画を実施した。計画はすべて参画方式でおこない、国内で募金、現物資材の提供、現地では村人たちによる資材の運搬、工事作業の協力があつた。その成果は単に設備ができ、村民の労働軽減、生産向上につながっただけではない。自分たちで考え、自分たちの力でやろうという気風が、この仕事をうづめて確立した。また現地びつたりの技術、「適正技術」が必要とわかつた。

その後ヒマラヤ技術協力会、さらにヒマラヤ保全協会を創設、活動を続け、一九八四年マグサイサイ賞国際理解賞を受賞した。

先生は現代文明に警告を発する予言者でもあつた。一九六四年に出版された『パーテイー学』のなかに、「東北アジア開発同盟」なる構想が提示されている。この地域にそれぞれ悩みをかかえる国、日本、韓国と朝鮮、中国、米、ソ連（当時）が、具体的な共同の創造行為をすることを通じて、新しい国際関係を育てようという。なんとこれは現在の六か国ではないか。冷戦下の時代誰が米中の接近を予想していたであろうか。大学問題の政治的問題化、灰色の未来学、民間による技術協力など、いち早く発言、実行した。創りだしたキャッチフレーズ、はやらせた用語は数しれない。「野外科学」「参画社会」「ひと仕事」「生きがい」「創造愛」「人間革命」「文化

革命」から「伝統体」「没我の文明」「晴耕雨創」である。たしかに先生は早過ぎた予言者でもあつた。早過ぎたがゆえに、時流に合わなかつた面もあろう。

先生の多彩な思考、多方面の活動、さまざまに分野の業績も、てんでんばらばらのように見えても、どこかでつながっている。何度か辞表を出し、いくつもの大学に赴任した。紆余曲折の一生を歩んだ先生であるが、じつはすべて「タテ」につながっているようにみえる。先生が提唱した「問題解決のプロセス」、いわゆるW型モデルに添った人生だったといえよう。深い思索と探検に始まり、歩きながら、行動しながら考え、食欲に広い分野の情報を集め、それを統合して幾多の業績を産みだしていった。その豊かな発想を仮説に留めず、あるものはそれを実証すべく、行動に移した。先生の残した「著作集」は、その思考、取材、統合、発想、構想、行動の全記録ともいえよう。

一九五八年西北ネパール学術探検時の写真は、民博のデータベースに入っていますので、ネット上でご覧ください。川喜田二郎先生の画像、撮影写真も含まれます。

Nepal Photo Database (<http://hq.minpaku.ac.jp/databases/nepal/>)

お知らせ 二〇一〇年三月二十七日に民博セミナー室に於いて同輩の梅棹忠夫氏を囲んで「川喜田二郎氏を語る」会が催されます。詳しくは次号およびAACRホームページで案内します。

川喜田二郎さんのことⅡ ボケのたわごと

並河 治

実は悩んでいる。先生とするか、さんとするか。私は誰であろうと第三者が同席されているときには「川喜田先生」または「先生」と呼ぶ。それに対して「先生」は「並河君」である。一人だけの会話では「川喜田さん」「ボケさん」になる。

私にとつては、まさに公私共にお世話になり、さまざまなことを教えていただいた「大先生」であるが、ここは「山仲間」のニユーズレターなので「川喜田さん」で許していただくだろうか？

初めてのネパール

チベット二郎ともパッカーネパリー（本当のネパール人）とも言われる川喜田さんのネパールとのかかわりは一九五三年、マナスル登山隊に科学班のメンバー（とは言っても、中尾佐助さんと二人だけ）として参加したことに始まる。古いことなので、若い会員のために少し触れておく。この時川喜田さんは、ネパールの中部を南から北まで、百四〇日間、千五〇〇キロ歩いている。当時は、カトマンズ盆地と、インド国境に近い一部の平地以外には、車で走れる道は殆んど無かつた。カトマンズからカカニヒルを抜け、ナワコット、アルガート、クルクガート、クンチャを通り、ポカラまで十七日、ポカラから

は巡礼ルートを通り、タトパニーからカリガンダキを廻行した。ポカラートウクチェ間は七日。その当時としては意外に速い。当時のカリガンダキは常に氾濫を起し、ガケにへばりつくような細い道だけで、何時滑り落ちてもおかしくないルートであった。トウクチェからカグベニで左折し、七日かけて五三〇〇mのティジェラに達した。その後の旅の流れを見ると、カグベニーティジェラ間は明らかに目的の道を逸れている。

五三〇〇mまで、どうして無駄足を踏んだのか良く判らない。現地人以外ではじめてこの峠を越した河口慧海師の足跡を、少しでも辿ろうとしたのではなかったか。カグベニに引き返し、東行して五三〇〇m近いニサンゴ峠を越えてマナンポットに入った。マナンポットはマルシャンディ河の上流ヤルゲンコーラの源流にあり、アンナプルナⅢの真北に当る。

ネパールでは珍しい、自治をかなり認められているチベット人の半王国であった。ここでは小銃を撃ち合う小戦争が起きていた。戦争が無ければ、チベット学者の川喜田さんはしばらく滞在したかったのではないか。ヤルゲンコーラをどんだん下り、マナスル北部から流れるズドコーラの合流点トンジェからズドコーラを廻行し、ブリガンダキとの分水嶺であるラルキヤ峠(五二〇〇m)を越え、サマに入った。サマには第一次マナスル登山隊のベースキャンプがある。七七五〇mまで登って撤退した登山隊と再会した。この隊にはAACKの加藤泰安さんや、川喜田さんと

特に親しかった田口二郎さんがいた。登山隊と別れ、プリンギヒマールとガネツシユヒマールの間、シアルコーラに沿ったトムジェから少し西北に登ったツムジェで本格的な民俗調査を行なった。ツムジェでは四〇日滞在した。

五〇〇〇m以上の峠を三回越えたこの旅で川喜田さんは何を調査したのでろう。一九五五年から京都大学生物誌研究会が発行した三巻の英文の調査報告書がある。Ⅱ巻目が「Land and Crops of Nepal Himalaya」である。この中にVegetationという項があった。何と、植物学者である中尾佐助さんでなく、川喜田さんが執筆しておられた。ひとつひとつの樹木の原地名、地名、標高が示され、その記録を基にした乾湿、標高別分布図が示されている。ネパールの植物社会を亜寒帯から熱帯まで一目で理解出来る世界で初めての図である。

この報告書を見たのは多分農学部修士コースの時だったと思う。川喜田さんのお名前は「人文地理学入門」で知っていたし、山の先輩として少しは面識があった。文学部卒の地理学者だと思っていた先輩が、実は立派な植物生態学者ではないか。三十歳を少し越えたぐらいで。第三巻のPeople of Nepal Himalayaを読んで、完全に脱帽してしまった。人間(人種、文化、生活技術、家畜、農業)そしてそれを取り巻く環境を短いといえば短い遠征期間にこれだけ調べ、記録し、客観的な記録だから本人の主観をそぎ落とすとしてまとめ上げている。先人の記載やお

ピニオンは一顧だにしていない。面白い。面白い。今西錦司先生は、このシリーズの第一巻で、川喜田さんのことをEthnologistであり、Geographerで日本山岳会員として紹介している。そして「自身のことはEcologist and Anthropologistとのたまっておられる。私はこの報告を見て川喜田さんは立派なEcologistだとの印象を持った。ただ、その後の行動を見ると、このネパールの旅、とくにツムジェの調査を通してEthnologistへの傾斜がますます強くなったのではないか。

鳥葬の国異聞

一九五八年、私は川喜田二郎率いる西北ネパール学術探検隊に加わった。

一九五八年七月八日全隊員はポカラに集結した。私は七月十二日に輸送隊として小方さんと共に先発したので、トウクチャまでは川喜田さんと同行していない。川喜田さんと同行したのは、トウクチャーツアルカ間十二日、ツアルカ滞在你およびムクトヒマールの登山の八月四日から九月五日までのほぼ一か月である。その後は私は曾根原さんなどと四名で九月八日からツアルカを離れ西北の旅に向った。トウクチャに再び集結したのは十一月一日、というような訳で、遠征期間は長かったけれど、川喜田さんと過ごしたのは五〇日間足らずである。この間の川喜田さんのエピソードを少し並べてみる。

歩く川喜田二郎

沢を歩き、横切る時、実にバランスが良い。

ひよいひよいと足を踏んで靴を濡らさない。登り下りの足どりは確か。時々立ち止ってはメモを取っている。カメラは持っているがあまり使わない。写真の技は三流か？雪上の歩き方は歩幅は狭く、安定している。登りは強い。八名のメンバーの中で、五三〇〇mのティジェラ越えでへばらなかつたのは川喜田、曾根原、並河の三名だけ。六二〇〇mのムクトヒマール支峰の登頂後もケロツとして降りて来た。ヤセ我慢かどうかは知らないが、決して弱みは見せない。

食べる

食物は何でも無口で食べる。遠征期間中の食事はひどかった。標高四三〇〇mのツアルカは大麦以外は何も育たない。曾根原さんと歩いた更に奥地ではいくつかの村の標高は四〇〇〇m以下で、ジャガイモやダツタンソバも作っていた。時には食用になる野草（イラクサ、ソバの仲間）もあった。我々は食料の殆んどを現地調達でまかした。ツアルカでは羊肉と乳製品（バター、チオールビー脱脂乳を乳酸発酵させたタラを固めたもの）以外は何も無い。トゥクチャの村長のシャンガラマンさんが米、ジャガイモ、タマネギなどを時々を送ってくれたが、何時来るかは判らない。川喜田さん以外の隊員の食後の話題は、常に食べ物のことだ。「あれが食べたい、これが食べたい。ポカラに帰ったら一人一羽づつトリを食べようや。」川喜田さんは無口で、この会話には加わらない。どんな物でも同じ顔で食べる。トゥクチャやポカラに降りてか

らも「これは旨い」という声は聞かなかつた。下でも多くは食べない。西岡さんとこつそり囁き合った。「先生は味盲ではないか？」果物は好き。

怒鳴る

時に怒鳴る。それも突然。座が白ける。その後は何もなかつたようにケロツとしている。なれてくると何でも無い。隊員によつては、シヨックを受けたり、考え込む人もいたようだ。

夢想する

ツアルカでは時々居なくなつた。テント場でもそういうことがあつた。どうせヒマだ。こつそり後を付ける。周囲が広く見渡せる所で首をピクツと上に振る。半眼になって山をじつと見ている。ほぼ三十分。やおらポケツトからハーモニカを出し少し吹く。上手ではないがえもいわれぬ満足そうな顔。間もなくフィールドノートを出して書き出す。厄介な隊員相手のストレス。川喜田さんの至福の間か？奥様のことを考えていたのではないか。この間約一時間。西岡さんに話すと「あんたもヒマやねえ。」

チベット語・英語

ツアルカに着く迄、何度かチベット語の勉強会をメステントでやつた。勿論先生は川喜田さん。ご本人以外はチンペンカンペンなのでご本人のレベルは判らない。教科書はイギリス登山隊がシエルパ対応のために使つた小

冊子。数日（一日三十分程度）の勉強で何とか分つたような気になつたのは若さのせいだ。ツアルカに着いてしゃべってみると案外通じた。ただし、あなたという意味（教科書では you）で話した「キヨラン」という語は実は「お前」であつた事が後で判つた。川喜田さんも僧正に対し「お前」と呼びかけていたことになる。ツアルカをはじめ、トルポ地域のどの村民も我々に対して「キヨラン」と言つていた。本当のところ、川喜田さんのチベット語がどのレベルだつたかは理解の外であるが、かなり突っ込んだ話もチベット人としていたようだ。川喜田さんの英語は流暢とは言えないが、正確だつたと思う。話すというよりは、頭の中で書いた英語を口に出す、日本人の学者英語。そんな感じ。

ガンコ

薬は嫌いである。ムクトヒマールから降りてツアルカに帰つてから、川喜田さんの歯が腫れた。顔が腫れ上つている。薬担当の西岡さんが抗生物質を吞ませようとしてもガンコして吞まない。一事が万事、こうと思つたら絶対に自説を曲げないことが多い。自らの論理の組立てに反することには妥協しないという事か。遠征中にそのために困つたのは最初だけ。慣れてくると隊員それぞれチエを出した。

シーカプロジェクト

一九六三年六月から約九か月、川喜田さんは、第三次東南アジア稲作民族調査団（民俗

学会)の団長として、中部ネパールシーカ谷の調査に出かけた。この地はポカラの西北三〇キロ強の、標高二〇〇〇m前後の丘陵地にある。ヒンドゥ教の聖地ムクチナートに至る巡礼路に沿っていくつかの村が散在している。住民の多くは北方起源を持つマガール族で、これにインド起源のチャットリーなどが加わる。まさにネパール丘陵地の典型で、農耕と牧畜を生業としている。宗教はヒンドゥ教であるが、マガール族には部族特有の宗教儀礼もある。この調査は大部の英文報告にまとめられた。丘陵に住むいわゆるヒマラヤンの生活の合理性とともに苦悩や矛盾をあぶり出し、この良き仲間達の生活の向上は、外部からの援助ではなく、彼らが自力で解決すべきだという考えを引き出した。調査結果がまとめられた直後の大学紛争は、川喜田さんには大学組織そのものに対する不信を生じさせたが、一方新しい構想、新しい哲学の具現に対するエネルギーと夢を生じさせた。そのひとつが一九七四年に創設された「ヒマラヤ技術協力会」である。この会には川喜田さんの構想に賛同する東京工大山岳部関係者や企業も加わり、この年の秋からシーカ谷における技術協力(パイプライン及びロープライン計画)が実施された。この計画を実施するに当り、地元民との徹底した議論が連日行われた。地元の人が一番困っている問題は何か、それを解決するにはどうしたら良いか。地元の人に考えさせる。日本側はヒントを出す。議論は議論を呼び、地元の人が、漠として頭

にあった問題点が徐々にまとまったものとなり、シーカ谷五か村の共通の合意がなされた。水の供給と、けわしい山からの木材などの運搬手段があれば良い。地元民の発想による、地元民のために、地元民が行動する。そのための援助をヒマラヤ技術協力会が行なう。これまでには無かった地元支援プロジェクトである。日本からは数kmの鉄製のロープと、無動力ポンプと水道管が運ばれ、国内での運搬は地元民が行った。

一九七七年、私はロープラインが自然環境にどのような環境を与えたかについての事後調査を行なった。政府援助のように、金は出すがやりっぱなしとは全く違う。川喜田さんはこの事後調査には大変力を入れていた。調査内容は別として、以前通った時と違って、シーカ谷の人々の明るさ、我々に対する親近感と誠意を強く感じた。私が帰途に付く時、村人が総出で見送り、首には花輪を掛け、貴重なユデタマゴまで持たせてくれた。これこそ川喜田さんの夢の実現であり、学術調査↓愛↓行動↓調査↓次の行動という流れの良い例ではなかったか。

川喜田さんさようなら

川喜田さんはAACK関東会には時間があれば出席しておられた。後半の十年くらいは、曾根原さんが声をかけ、自宅までお送りしていたようだ。山やプロジェクトの合間に、時々ビールを飲みながら話す機会が何度かあった。その中で川喜田さんはまことに良心的なコスモポリタンで、不条理な権力に対して文の力で闘った人、という感じを強くした。全

力で、人のために、ひとつの哲学を胸に走り続けた八十九年、その原点が京都北山であったことに嬉しさと親近さを感じている。さようなら。

求道者 川喜田二郎さん

酒井敏明

初めてお会いしたのはいつのことであったか、はつきりしない。京大山岳部が関係するある会合で川喜田二郎さんと梅棹忠夫さんのお二人が顔をそろえて出席されるところに、二、三回続けて参加する機会があった。たしかドキュメンテーション・コミティという名の小さな集まりで、たくさんのデータをカードに書きうつすやりかたについて講義を聴いたり実地の練習をしたりする会であった。うる覚えだけれども、教材としてつかったあの大量のナマの資料は第一次マナスル遠征隊科学班の現地調査にかかわるものと想像されるので、もしそうであるとすれば時期は一九五四年ごろのことになる。私は三回生になっただけで、部室でも多少大きな顔をするようになっていたかも知れないころである。場所は近衛通りの楽友会館二階の一室であった。

数回この集まりに出席したのだが、先輩の中にはずいぶん優秀な人がいらつしやつて、新しい仕事に打ち込んでおられるのだと強い感銘を受け、また時代の先端をゆく仕事を同じグループの仲間としてやってゆくこと

になるかもしれないと、奮い立つ思いをしたのである。しかし、なぜかこの集まりは尻すぼみとなり、いつのまにか中途半端に終わってしまったとの印象が残っている。おそらくのちに発展してKJ法というかたちに完成された情報処理の技法に関連した試行的な集まりであったと、ひそかに私は想像している。

一九五八年の西北ネパール学術調査隊は川喜田さんが当時の勤務先大阪市立大学の若手研究者を中心として編成されたのだが、京大山岳部でいっしょに山登りに励んでいた並河治さんや曾根原恵夫くんが隊員であったし、装備・食糧その他を発注し梱包する準備作業はAACKのチョゴリザ征隊と同時並行的に進められたから、私たちにはとても他人事とは思えない近いものであった。

川喜田さんは一九五三年のマナスル学術班の報告をおもに『大阪市立大学紀要』や日本民族学会の『民族学研究』に発表されたが、一般向きの『ネパール王国探検記』を一九五七年に光文社のカッパブックスで出版された。科学調査の旅の一部始終を読みやすい文章でいきいきと描き、このヒマラヤ山中の住民を身近な隣人のごとくに感じさせる物語をもちろん私たちは感激して読んだ。この本は当時の読書界に受け入れられてベストセラーになった。

ネパールはながらく鎖国を続けてきて第二次大戦後ようやく外国人を受け入れ始めたので、一九五二年の西堀栄三郎さんの国王謁見にはじまるマナスル登山計画が新聞紙上にとりあげられるまで、普通の日本人はネパール

のことなど誰も知らなかったといつても良い。川喜田さんのこの本はヒマラヤ山中の小王国ネパールの自然と人と文化とを日本国民にはじめて紹介したものであった。寺が多い首都カトマンズ、ヒンドゥーの神々と祭のこともなども説明されているが、本の内容の大部分は高度三〇〇〇メートルあたりより上の、チベット系住民の暮らしと習俗を描くものである。日本人が好む異国趣味に訴えるところもあったといえるが、対象についての著者のあふれるような好奇心、強い共感が、ぐいぐいと読者をひきつける魅力であった。

中尾佐助さんと二人でおこなわれた第一回探検が予備踏査的な広域調査と地域を限定する集約調査をミックスした性格をもったのに対し、一九五八年には西北ネパールの秘境トルポ地域にはいり、専門を異にする六人の調査者による集約的調査をおこなうことを目指したものであった。調査対象の村人たちと良い関係を築くことができたために鳥葬という特異な習俗をも調査、紹介したこともあり、『鳥葬の国』と題して一九六〇年に刊行された二冊目のカッパブックスは前著と同じくベストセラーになった。

私は文学部文学科英米文学専攻を卒業したのち、あらためて学士入学で史学科人文地理学専攻学生になったので、川喜田さんが卒業したあと十数年後に同じ教室に入った後輩にあたる。しかし川喜田さんは教室の会合や人文地理学会の研究例会その他にあまりお顔を出すことがなかったので、この面での接触はほとんどなかった。勤務先が大阪市立大学か

ら東京工業大学にかわり、東京に住居をかまえられたこと、また学問的関心が地理学よりも文化人類学を中心とする領域に向けられたからではないだろうか。ただ一度だけ、私が高松市で講演したときに、年に一回開催する特別例会に講演をお願いしたことがある。一九八七年六月新潟市でおこなわれた特別例会であったが、快く承諾していただき、当時同じ東工大のスタッフとしてよくいっしょに行動しておられた高山龍三さんを伴って新潟の会場までお出ましいただいたのである。よくこんな大物に出席してもらうことができたねと驚く参会者が大勢いて、いささか面目をほどこした思いをもったことを覚えている。

それより二〇年ほどさかのぼるが、私が東海大学に勤務していたころ、初夏の数日川喜田さん、高山さん、飯島茂さん、神原達さんなど当時の数少ないネパール研究者たちが合宿しておこなう勉強会があり、私にも声がかかったのでいっしょに泊り込む機会があった。朝から晩まで熱心に議論をしたし、その結果はのちに分担執筆で原稿を書いて本を作ることになっていった。後日『ヒマラヤ地方の民族と政治』と題された三〇〇ページ余の出版物一部が送られてきたのだが、この本には一ページ目に「本研究は民主主義研究会より川喜田二郎氏（東京工業大学教授）に調査委託したその報告書である」の短い断り書きこそ書いてはあるものの、執筆者名、刊行所名や刊行期日を明記するべき奥付がないなど、いかに不思議なものであった。

会合の初めのほうで、経費の出所を明らかにしにくい事情がある云々の説明を聞いていたと思うので、出版物を手にして不審な感じは抱いたけれどもこの話はそのまままで今に至っている。高山さんにもお尋ねしたらたちどころに明解なお答えを聞くことができたに違いないが、わたしはそうはしなかった。なにしろ当時人気の高かったフランス人女性シャンソン歌手イヴェット・ジローにちなんで、チベット・ジロウの愛称をもつて呼ばれていた川喜田さんのことから、さらにいえば常人とはいいがたく、神がかり的な熱中人間だったから、少しぐらい不可解なことが起こっても驚いてはいけないのである。

川喜田さんは大学紛争に際して東京工業大学を辞任されたあとKJ法学会を創設して、この斬新な情報処理の哲学と技法とを一般社会とくに企業人を対象として広く普及を図る事業を展開する、行動人間であった。同時に、ご自身が研究、解明を率先しておこなったチベット文明をきわめて高く評価し、その意義を世界に知らしめようと活動されたが、その延長線上で、ヒマラヤ高地のチベット族住民の生活の安定、環境の保全をはかる現実的な支援の必要性を強調し、海外技術協力という運動を開始された。お仕着せの一方的な援助ではなく、住民みずからの参与と工夫努力に発する民間レベルの協力事業でなくてはならないとする、独特の思想で推進されたところが、いかにもユニークな川喜田流であった。政府権力をバックにして発展途上の地に対するのではなく、むしろ在野の精神という

一線をまもる姿勢がすがすがしかったと私は思う。また、「チベット解放」を強行した北京政権の暴力と圧制を徹底して批判しつづけたところに、一徹な行動人、信念の人川喜田二郎の真面目を見出すことができる。秩父宮記念学術賞（一九七八年）をはじめ、ネパール政府から二度にわたる勲章の受勲、マグサイサイ賞（一九八四年、平和・国際理解）を受賞されるなど、川喜田さんの業績が高く評価され、ひろく知れ渡っていることは、私どもにも誇らしいことである。

アンチョコ会という集まりは今でも日陰の存在なのであろうか。一九五三年のアンナプルナ遠征隊、五八年のチョゴリザ遠征隊それぞれの関係者が寄り集まってスタートした会は、のちに他の不純物もつけ加わって「アンチョコノシヤサルの会」とふくらんでいった。呼びにくい名前是不都合、略して「アンチョコ会」と名乗るにいたったAACK有志の親睦会であつて、原則的に夏に一回例会を開いてきた。たまたま世話役を私がする機会があつた年に、他のメンバーには事前に諮らなかつたような気がするのだけれども、川喜田さんをお誘いしたところ、ご機嫌よく参加されたのが、一九九四年の滋賀県今津町丁子屋例会のときであつた。お顔をお見せになつた最後である二〇〇三年の奈良県川上村入之波温泉の集いまで、一〇年のあいだに七回参加していただいた。

東京方面からの参加者が多くはないなかで、遠路はるばる、また後年は体力が徐々に弱まりゆくのを当然自覚していらつしやつた

と思うのだが、精勤に出席していただき、ほんとうに嬉しかった。特におわりの三回は喜美子奥様とおふたりで仲良く出席されたのだが、川喜田さんはお若いときとはちがう比較的に静かな語り口でお話しになり、往昔の教祖的な雰囲気もうかがうことはあまりなかつたように思う。それでも、座談の名手の片鱗をみせ、しばしば会合を盛り上げてくださった。かつて遊んだ湖北や奥吉野などの地を懐旧の念をもつて訪れるのを楽しんでいらつしやつたのかと、今にして思うのである。

朝日小事典『ヒマラヤ』を編集刊行されたとき（一九七七年）、私も指名されたので、ほんのわずかだけ分担執筆する機会があつた。とはいへ、AACKの後輩として、また、京大地理学教室の後輩として、この偉大な先達にもつともつと接近して、教えを乞ひ、啓発されることができた筈であり、川喜田さんとのつながりがこんなにもか細く弱いままに終わったことにいまさらながら気付く自分を、努力を怠つてきた自分を、恥ずかしく思う。

JACの『山』七七二号の追悼の文章で、この野外学者は熱血漢であり、扇動者であつたと失礼なラベルを張り、さらに企画者、行動人としての面を述べたのであるが、もう一つ別の尊称を捧げるとするならば、求道者があてはまるのではないだろうか。川喜田二郎さんはチベット文明を解明し、その社会が平和の内に存続発展することを希求し、あとにつづくものにそのことを託して生涯を終えられたと、考えるからである。

謹んでご冥福をお祈りしつつ、筆をおく。

高山龍三氏の文の最後に紹介されております画像のデータベースは、民博の文化資源プロジェクトのひとつとして取り組まれたもの。これについては、南真木人氏が「民博通信 No. 一八号」の資料と情報欄に「パイオニア人類学者が撮影した現地写真の保存・公開―ネパール写真データベース」と題して紹介されているので、その一部をここに転載させていただきます。

ネパール写真データベースは、一九五八年に「西北ネパール学術探検隊」に参加した高山龍三氏らが撮影した写真をデジタル化して保存し、これ以上の劣化・退色を防ぐとともに、そのデータベースを「みんぱく」のウェブサイトで一般に公開するプロジェクトである。二〇〇四年春に、文化資源プロジェクトのひとつとして始まったネパール写真データベース・プロジェクトでは、高山氏の全面的な協力のもと、四四九二点の写真をデジタル化し、撮影者、撮影年月日、地域、内容（簡単なキャプション）を入力した。インターネット上ではこのうち、劣化や損傷の軽微な写真三六一五点を公開している。

プロジェクトの目的は四つある。ひとつは、日本のパイオニア人類学者が撮影した貴重な歴史的写真を「みんぱく」が保管し、人類学史の一次資料として後世に残すことである。とくに、西北ネパール学術探検隊が撮影したネパール・ドルパ郡の写真は、チベット動乱（一九五九年）の一年前にネパール・チベッ

ト国境周辺の状況を記録している点で世界的にみてもきわめて貴重な資料である。

第二は、データベースを研究者および一般の方に公開し、研究や教育などに活用してもらうことである。

第三は、調査記録を現地へ還元することである。データベースの英語版は、海外の研究者をはじめ、被写体となった現地の人びとやその子孫が、五〇年前の村の様子やすでに亡くなった人の写真に、より容易にアクセスできるよう作成した。

第四は、標本資料の多角的な情報を関連づけることである。データベースには現地写真

アンナプルナ周遊トレッキングと チュル―ウエスト峰

安田隆彦

二〇〇七年八月 安仁屋崑崙隊五名は六四六八m峰、六三三二m峰の初登頂を成功させた。

この活動途中、鋭いピラミッド型の美しい山を遠望し、次の目標にふさわしいものと考えた (News Letter 43号 Nov. 2007 に詳報)。その後調査の結果、ソ連製地図によると六八五一m峰と断定された。

この山は西部崑崙山脈の中では三番目の高峰で、未踏峰の中では一番高い山になる。

二〇〇八年九月 隊員五人が確定し準備山行が六回行われた。

の他に、探検隊が収集した民具（「みんぱく」の標本資料）のカラー写真二九五点が含まれる。これらの写真とその使用しない着用状況を映しだす現地写真（複数）を相互にリンクさせ、付帯情報の連関をはかった。

今後問題があれば速やかに改善するという柔軟な姿勢と体制を維持して、貴重な写真の公開および現地への還元と肖像権の保護という相反する課題を調整し、ネパール写真データベースのより一層の充実をはかっていたと思う。

南真木人氏…

民博 研究戦略センター准教授 人類学

隊長 安仁屋政武、副隊長 芝田正樹
隊員 遠藤州、出雲路敬明、安田隆彦
準備山行

二〇〇八年一〇月 八ヶ岳 天狗岳

一月 八方尾根 雪上訓練

二月 八ヶ岳 北岳

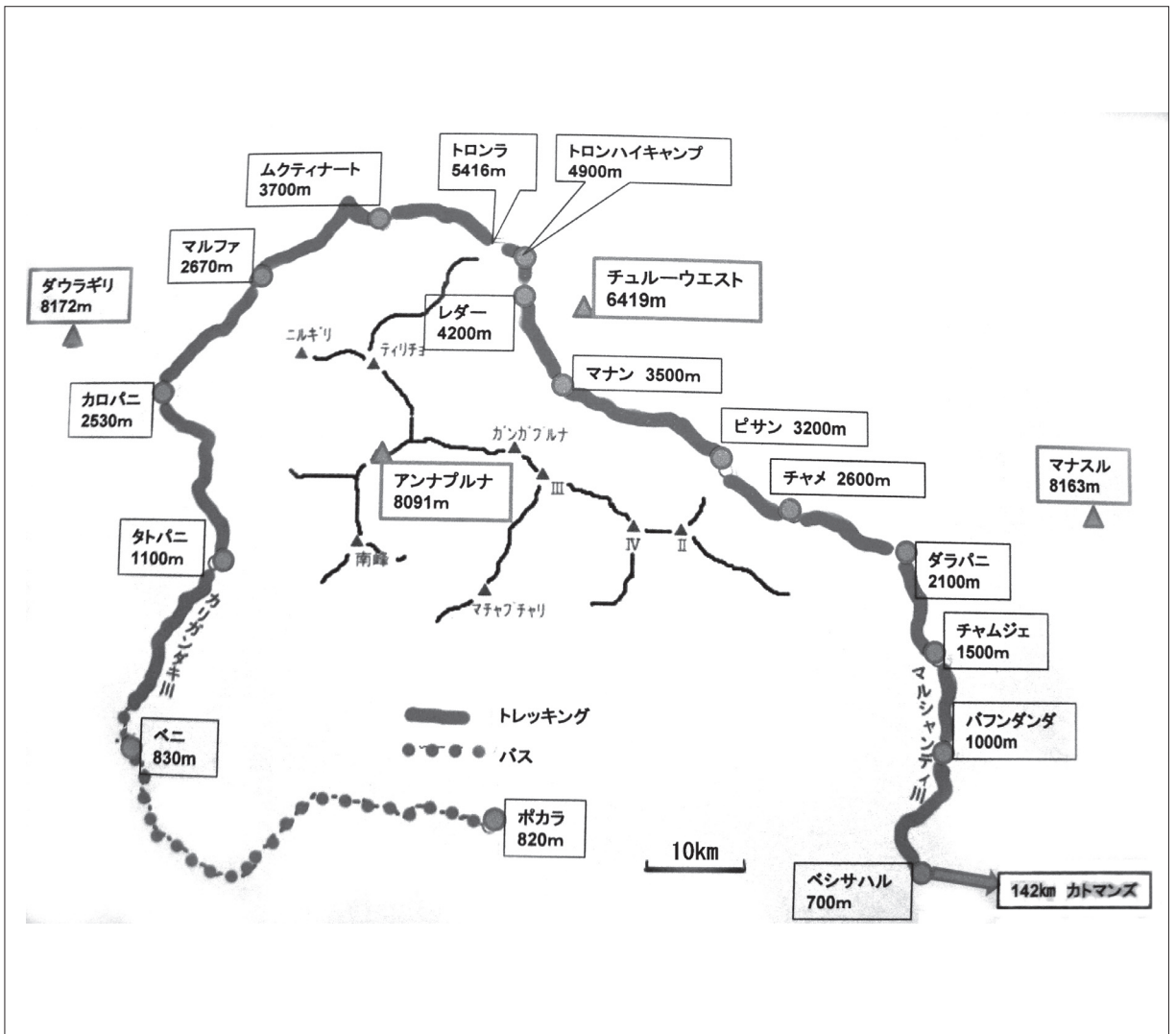
二〇〇九年 二月 八ヶ岳 ジョウゴ沢 水壁訓練

四月 白馬雪上訓練

五月 富士山高度順応訓練

AACK海外助成金の申請も認可され、食料の買い出しを除くすべての準備が整った

二〇〇九年七月六日、ウルムチで大規模な暴動が発生した。事態を見守る中、現地への電話もメールもカットされ、エージェントとの連絡が全くできなくなる。外務省掲示板には渡航自粛の指示。これではとても遠征など



アンナプルナ周回ルート図

出来ないかと判断し、断念することを決定した。せつかく一月近い休暇を皆に認められたあと、準備も万端整っている。この体制で行けるヒマラヤを目指そうと対象の検討を始める。すぐにチュルウエストが候補に上がる。ネット上では登山最適期が七月から一〇月になつており高度は六四一九m。難易度もほぼ崑崙で目標にしたものと同じ程度で装備類に不安はない。数社から見積もりを取り、よさそうなのソニートラベルと最終合意できたのが出発わずか二日前。山岳共済保険も期間、難易度とも同じようなので、変更なしでゆける交渉が成立したと堀内保険担当会員からの柔軟な返答。ただしネパール通の会員からはモンズン時期にヒマラヤ登山など聞いたことがないとの話も聞かれた。しかし初めて使用するエージェントの、モンズンだから雨が降らないとは言わないが、登山には適した時期、との言葉を信じて出発。

チュルウエストはアンナプルナを周遊するトレッキングルートの途中、レダーから東に入った山域に位置する。ネパールでは山の高さによって許可条件がはっきり区分されているが、この山は六五〇〇mより低いトレッキングピークとして入山料も安く（一パーティー三五〇ドル）、許可は申請当日に取れる。

以下二八日間のトレッキング、登山の様子を述べる。

二〇〇九年七月二六日 成田 一六・五五発
TG677 バンコック着二一・二五 空港

ホテル泊

七月二七日 バンコック一〇・三五発
TG319 カトマンズ着 一二・四五 マル
シャンディホテル泊

エージェントと契約後ホテル周辺にたくさ
んある登山用品店で不足品の補充。

七月二八日 曇り時々晴れ 二二度 カトマ
ンズ 一一・五〇 ベシサハル(七〇〇m)
一八・五〇

総ての荷物、人を一台のバスに寄せ、喧騒
のカトマンズを後にする。五人の隊員をサ
ポートする現地側はトレッキングガイドを元
締めに登山ガイドとその補助、コックとその
補助、ポーターが九人の総勢一四人。電気の
ない薄汚いアンナプルナホテル泊

七月二九日 曇り一時雨 二四度 ベシサハ
ル 八・三〇 バフンダンダ(二五〇〇m)

一六・三〇 スーパービューロジ泊

アンナプルナトレッキングの開始、マル
シャンディ川沿いに歩き始める。濁流の川の
水量がものすごく多く、この沢がなくなるま
で歩くのかとたじろぐほど。トレッキング
チェックポイントで登録、登録所は一周する
間に七ヶ所もあった。街道沿いには休憩所が
所々あるがどこからも客引きの声が掛からな
い。汚い恰好をした子供たちも誰一人マネー、
キャンディーと言って近寄ってくるものな
し。聞けば村の長たちが話合せてそのよう
な行為をしないよう申し合わせているとか。
途上国を歩く時、いつも嫌な思いをすること
がなく心が緩む。昼食後一時間ほど初めての
雨になり、用意してきた雨具一式をつけて軽

快に歩く。外からの雨は完全に防げたが、内
からの汗に閉口。ロジからマルシャンディ
溪谷の眺めが素晴らしい。

七月三〇日 曇り 二二度 バフンダンダ

七・四五 チャムジェ(一五〇〇m) 一三・
四五 レインボーロジ泊

段々畑の田植えが美しい谷から、少しづつ
斜面の急な山間になってくる。谷底から何百
mもある山の上の方に集落が見られる。少し
でも斜面耕作地があるとそこだけでほぼ自給
自足できる人数の部落が長い間に形成されて
いるのだろう。川筋にはマリファナの自生地
が多く見られる。

七月三一日 曇り 二〇度 チャムジェ

七・四五 ダラパニ(二二〇〇m) 一五・
一〇 テイバタンホテル泊

山が迫ってきて立派な滝が多く見られる。
轟々たる滝見の朝食は印象的。

閑散期のこの時期、昼食の用意を予めして
いるレストランはない。そのため注文を受け
てから食材の手配をするので食事が出てくる
まで一時間以上は裕にかかる。欧米人はゆつ
たりと待つことを楽しんでるようで、我々
のように遅いサーブिसにイラつくことはな
い。ヤギ一頭、鶏一羽つぶして待っていても
それを消化するだけの客が来ない。電気がな
いので冷蔵庫も役に立たず、ほとんどの宿が
肉気のまったくない菜食主義の食事。しかも
味はいただけない。欧米人はベジタリアンと
言うだけで味に関係なく喜んでるとか。ガ
イドが見かねたのか、背中に担いで鶏を売り
歩いている行商人から一羽買って供してくれ

た。

八月一日 曇り 一九度 ダラパニ 七・
四五 チャメ(二六六五m) 一四・一五
シャングリラ泊

夕日に映えるマナスルの雄姿を遠望し、ア
ンナプルナII峰七九三七mも垣間見た。ホテ
ルの横は一三〇〇mの巨大岩壁。その他にも
造山活動の諸現象が顕著に見られるところが
多数あった。それらの形成過程を説明する安
仁屋隊長の専門的解説がトレッキング中の大
きな魅力であった。また岩に興味のある遠藤
隊員は触ったりたたいたり、岩の記録をとる
のに忙しかった。

八月二日 曇り時々晴れ 一二度 チャメ

七・四〇 ロイヤールピサン(三二二〇〇m)
一二・四五 マヤホテル泊

スワルガワリ橋のそば、高さ一五〇〇m
幅三kmのツルツルの岩壁が、川底から雲の中
まで凹面状に立ち上がっている様は一番印象
に残った岩壁である。アンナプルナIV峰も顔
を出してくれた。アンナプルナ山塊のレイ
ンシャドーに入ったのか、晴れ間が多くな
り、空気も乾燥してくる。しかし四〇〇〇
六〇〇〇mぐらいの高さの所はいつも雲の発
生している時が多かった。

八月三日 晴れ時々曇り 一四度 ロイヤール
ピサン 七・五〇 マナン(三五四〇m)
一二・五〇 テイリチョウホテル泊

アンナプルナIII峰七五五五m、ガンガブル
ナ峰七四五四mを愛でながら平坦なルート
を歩く。ネパールにある三つの山岳学校の一つ
の近くを通る。ひとクラス四〇人が三カ月の



Chulu ルート図



Chulu West

たところ北側の沢に入る。マルシャンディ川の濁流と違い、きれいな水に濡れる足も気にならない。三〇〇mほどの盆地のような所に出る。北側は五〇〇mほどの断崖、南側は一〇〇mほどの高さのモレーンに囲まれた幅一〇〇mほどの平らな牧草地。中を小川がわずかにうねりながら流れる桃源郷のようなBCテント地。高度順応のためさらに二〇〇mほ

訓練を受ける全寮制学校、外国人の場合費用は二二〇〇ドル。街道では一番活発なチベット仏教寺院ブラガゴンパの大きな伽藍を見る。
八月四日 晴れ一時曇り 一四度 マナン 休日
六日間歩いた後の休日。思い思いにガンガブルナ氷河の脇を歩く。
同行のコックが持参の炊事道具と食材で調理を始める。スープを一口飲んだだけで全員がうまいと感ずる腕前、以降はぐつと食事がおいしくなった。肉不足なのでヤギ一頭七五ドルで購入。マナン村は最奥の村で四〇戸ほど、石作りのしつかりした町並み。カメラ充電ショップが繁盛していた。ティリチヨ峰

七一三四mがどっしりと見える。
八月五日 晴れ一時曇り 一三度 マナン 八〇〇 レダー(四二〇〇m) 一三・四〇 スノーランドホテル横に幕営
ギャンチャン谷から初めてチュルウエエスト、チュルセンターラル峰の雄姿が見え奮い立つ。
西面の岩壁は一〇〇〇m余り切れ落ちている。エージェント提供のスイス、スピード社製の二人用テントの使用開始。荷物スペースが大きく、日本製の二人用よりはひと回り大きい。
八月六日(木) 小雨のち曇り 一一度 八〇〇 レダー発 一一・〇〇 ベースキャンプ着(四九三〇m) 一三・一〇 ベースキャ

ンプ発 一四・二五 レダー着
いよいよトレッキングルートから離れて登山開始の日、一晩中小雨が降っていた。
朝小雨の中、紅茶だよとの声にびっくり。テントの中に紅茶の出前サービス。続いてたらいにお湯を入れて洗顔用にとテント前に置かれる。英国式に訓練されたサービス。ホテルすぐ東の尾根を登り始める。尾根の上は高山植物が一面に花を咲かせ、気にしながらも美しい花を踏んづけながら登攀。真夏のモンスーン期は高山植物にとつても恵みの時、牧草の新緑、赤、青、黄の原色で咲き誇る花。花に興味のある出雲路隊員は写真を撮るのにしばしば歩を止めた。四〇〇mほど登つ

ここからは、引き続き浮石の多いリッジを登る。風化した千枚岩、頁岩で、斜面左下方向の層理により風化層の下がスラブになっている。荷物は一五kg程度のはずだが、ザツクの重さがこたえる。

一二・一〇 当初のHC予定地着。テント、炊事用具、食料を運ぶポーター二名は先に到着し、ケロシンコンロでホットコーヒーを入れて待っていた。ここまでのメンバーは、サデス、クルライ、ポーター二名、それと我々四名。雨は止んだが、ガスがかかり、時々左の氷河が見える程度。

ここから尾根沿いに進み、一度鞍部に下ってから、岩場を登り小さなピークを越えたところでHCを設営することにする。一二・二〇着。

氷河の上より尾根の上の方が寒くないというので、尾根上にテント用の平地を整地することに。ポーターたちはピッケルをツルハシのように使い、厚さ二〇cmほどの石英脈もうまいこと崩しながら、瞬く間にテント三張分と炊事用スペースを整地し、HCを設営してしまった。GPSによる標高は五五六〇m。

雨は止んだが、ずっとガスが続き、目の前の氷河と対岸の尾根以外は何も見えない。

一八・〇〇 夕食。水は一〇m下の氷河の窪みからとり、ポーターが沸かしたお湯で、チキンラーメンを作って食べた。少し頭痛がするが、食欲はある。

一九・二〇 柴苓湯を一包飲み、就寝。霧雨。夜半、時々雨が強くなり、途中からぱら

ぱらというアラレの音に変わった。雪崩の音が時々響く。時々息苦しい感じで目が覚めた。高度障害か。

八月一〇日 雪後雨後曇り マイナス二度 HC↓BC↓レダ

前日に決めた三・〇〇に起床。雪、一cmぐらい積もっている。天気の様子を見るしかない。六・二〇 降雪が続き、積雪が三cmになった。氷河対岸の尾根が見えるが、上部は視界が効かない。ポーターが沸かしたお湯でグラノーラ、ポータージュースの朝食を食べる。

七・四〇 降雪が続き、撤収を決める。新雪が積もった氷河は非常に危険で、降雪により氷河の通過が厳しくなったこと、サデスの経験でこのような降雪が一週間も続いたこともあるとのことから、ポーターが歩ける内に撤収した方が良いとの判断による。また、ロックバンドを通過して荷上げできるポーターが二名だけで、HCの食料、燃料が限られていたことも、理由の一つである。

八・〇五 HC撤収して出発。積雪は四cmになった。

八・四五 当初のHC予定地。

標高五四〇〇mで積雪が無くなる。ロックバンドを懸垂で降りる。

九・三五 全員がロックバンドを通過。サデスとクルライがフィックスを回収。

九・五五 コル着。コルからはガレ場を砂走りのように下る。

一〇・一〇 BC着。BC到着後、雨が激しくなる。

一一・四五 BC発。一二時を回ってから雨

がようやく止む。

一二・五〇 レダ着。濡れたものを乾かし、明日からのアンナプルナ周遊トレッキングの続きに備える。

八月一日 曇りのち晴れ 八度 レダ
七・二〇 ハイキャンプホテル(四九〇〇m)

一三・一〇

トレッキングの再開、ポーターたちの荷は一人約四〇kg。我々より小柄でやせた体でゴムゾリを履いただけ、石ころだらけや岩の道を頭から担いで歩き続ける、感嘆と感謝の気持ちで一杯。大規模な地滑り発生地帯を通過、谷底に馬の転げ落ちた姿目撃。ルート中最高点の宿は定員二五〇人、シーズン中は床



撤収の朝。2009年8月10日 安仁屋撮影



トロン峠にて 隊員写真 (左から安田、芝田、出雲路、安仁屋、遠藤、サンデス、クルライ)



2009年8月13日ニルギリ峰7061m

にごろ寝の人で埋まるとか。

八月一二日 晴れ 二度 ハイキャンプホテル 五・二〇 トロン峠(五四二六m) 八・

〇〇 ムクティナート(三七六〇m) 一三・

〇〇 シュリームクティナートロツジ横幕営

峠越えのため早立ち、朝日に輝くチュル―三峰を眺めながらアタック日の天気悪さを嘆く。峠のおびただしいお経の旗タルチョは旅情を深める。ムクティナートから物資を運ぶ馬の隊商が峠を越えてマルシャンディ川沿いの村々にゆく。

峠を越えると途端に乾燥地帯になり緑が消える。ムクティナートではヒンズー教とチベット仏教仲良く両方の聖地となっているサ

ンバゴンパに礼拝。

八月一三日 晴れ 一二度 ムクティナート 七・三〇 マルフア(二六七〇m) 一六・三〇 リタゲストハウス泊

ダウラギリ八一七二m峰の威容を遠望。少し回り道をしてカグベニの城壁都市(二六世紀)を見る。アツパームスタングトレッキングルートの始点を示す大きな看板を見ながら、昔のムスタング王国に夢を馳せる。マルファでは河口慧海(一八九九年外国人)としては初めて当地域に入境)が滞在した住居を見る。

八月一四日 曇り一時雨 一六度 マルフア 八・一〇 カロパニ 一五・〇〇 エンジェルゲストハウス泊

カリガンダキ川沿いは一〇時を過ぎると谷幅が広いにもかかわらず風がものすごく強くなり、帽子を気にしながら歩く。ニルギリ峰七〇六一mの北壁が切れ落ちている。空気が湿ってきて樹林帯が見え始める。

八月一五日 曇り時々雨 一四度 カロパニ 七・二〇 タトパニ(一一〇〇m) 一五・二五 オールドカマラ泊

崖崩れが進行中の所を、上を見ながら小走りで抜ける。重荷のポーターも同じ。カリガンダキ川沿いはジープ用の道路が最奥のムクティナートまでついている。しかし雨季のためツタツタに寸断され、それが逆に作用して車の排気ガスでトレッキング気分が壊れる事はなかった。タトパニは河原に温泉があり、ゆつくり浸かりながら飲むビールは格別。

八月一六日 雨一時曇り 二〇度 タトパニ 八・三〇 ポカラ(八二〇m) 一八・四〇 シルバーオークスイン泊
本格的な雨の日。年間雨量がムクティナートでは一六五mmしかないが、カリガンダキ川を下るにつれて湿っぽくなり、最終日は雨の中を歩かねばならなかった。四日間の歩きで砂漠状の乾燥地帯から雨ばかりの熱帯雨林まで歩くという貴重な経験をした。雨で道が壊れていてどこまでバスが入っているか分からない。最初は一時間半でバスに乗れるとの期待が、結果は一三・三五まで歩くはめになった。乗ったはいいが天井に満載の荷物、道路脇はすぐに断崖で渦巻く怒涛がすぐそば。車が大きく谷側に揺れるたび、心臓が止まりそうになり、歩けばよかったと悔やむ。山側に

座った人は知らぬが仏ですぐに居眠り。ポカラの湖が見えたのは夕闇迫る頃、あわただしいビフテキの夕食とチップの授与式でトレッキングが終了した。

八月一七日 曇り時々雨 二四度 ポカラ 散策

八月一八日 雨 二四度 ポカラ 一二・三五 カトマンズ 一三・一〇

八月一九日 晴れ 二二度 カトマンズ 散策

八月二〇日 曇り一時雨 カトマンズ 散策

八月二二日 カトマンズ 一三・五〇
TG320 バンロック 一八・二五着

八月二二日 成田 〇六・二〇着

後記

ウルムチ暴動の影響で予期せぬヒマラヤの

旅となった。

情勢が落ち着いた後再び崑崙に挑む楽しみが先に延びたのに加え、新たにネパールの山も身近なものになった。ネパールは崑崙に比してアクセス良く、費用も崑崙の約五五万円に対して三五万円（エージェント二〇、交通費一二、雑費三）と安く済む。ほとんどの行程ポーターが荷を担いでくれるのでラクチン。トレッキングルートは魅力のあるところがたくさんあり、登攀として次はメラピーク（六四七六m）あたりが格好の対象になる。来年あたり同好の士が集まれば挑戦してみたい。

老後の登山は夢のように楽しいが、それにもまして出発までの一年間細心の健康管理をし、毎日のトレーニングを積み重ね、生き生きと日々暮らせるのが至福の喜びである。

長白山 時空を越えた旅

栗田靖之

近年 A A C K の関係者が長白山に登ったという話は、聞いたことがない。長白山というのは中国での呼び名であり、朝鮮半島での名称は白頭山であるが、ここではこの二つの名称を、文脈にしたがって混在して用いることにする。

二〇〇九年秋、それでは一度、長白山に登ろうと斎藤惇生さんが言い出した。

長白山に登るのなら、この山に深い縁をもっている梅棹忠夫さんに話を聞きたいと思った。梅棹さんと白頭山の結びつきは、一九三五年、梅棹さんが京都府立京都第一中学（京一中）の一年生の時以来である。その年、京大の白頭山遠征隊が冬季初登頂を終えて帰国した。その遠征隊のメンバーの中で、今西錦司、西堀栄三郎、奥貞雄、谷博さんは、京一中の卒業生であった。京一中はこれらの先輩を招いて、全校生に講演会を開いた。梅棹さんは先輩たちの講演内容は忘れたが、その後で行われた映画会で上映された記録映画の

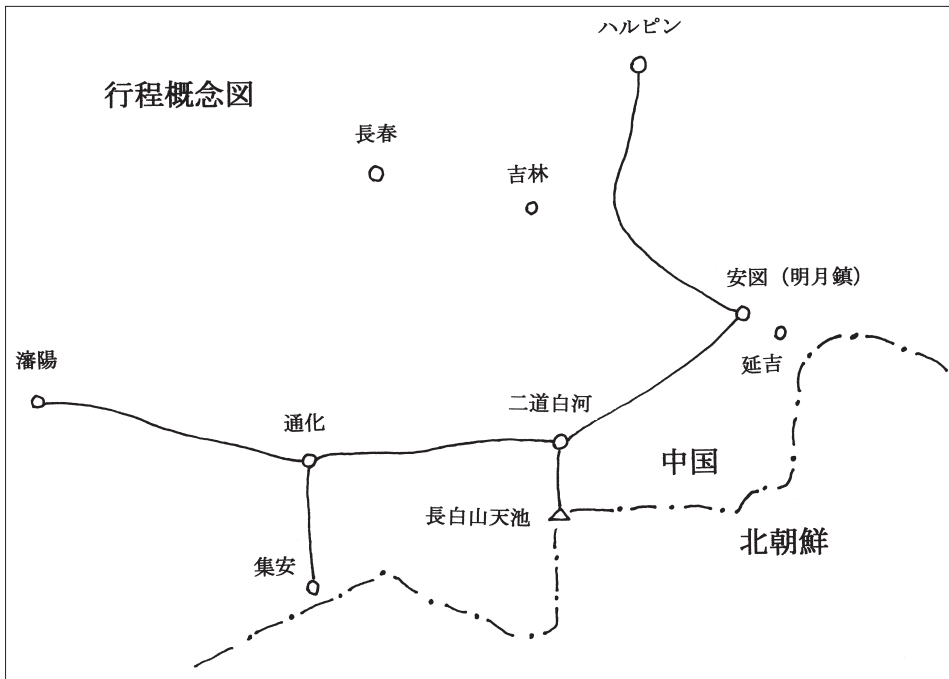
素晴らしさに深く心を奪われた。そして「自分も、こういうことをやろう」と心に決めたという（栗田 一九九〇）。

梅棹さんが第三高等学校の学生となった一九四〇年、梅棹忠夫、藤田和夫、伴豊さんの三人は、当時の朝鮮側から白頭山に登り、その北斜面を下った。原生林の中を一週間にわたり踏破し、二道白河に至った。そして第二松花江の源流を確認するという地理上の発見をしている。このように梅棄さんにとって、白頭山はフィールド・ワーカーとしての出発点となる山であった。

二〇〇九年九月九日、梅棄忠夫さんを国立民族学博物館の研究室に訪ねて、長白山に行



長白山の天池



くださった(梅棹忠夫、藤田和夫編 一九九五)。それとともに『朝鮮名峰 白頭山 金剛山』(久保田 一九八八)と『中国名山 長白山 風光撮影集』(孟 平)の二冊の文献を紹介していただいた。

九月一九日、関西空港から中国南方航空でハルピンに直行した。翌日はハルピン市内の見物に当たった。

二一日、朝八時、専用のマイクロバスでハルピンを出発。この旅の团长は齋藤惇生さん、メンバーは、寺本巖さん、笹谷哲也、アサミさん夫妻、栗田靖之、中国側は許宇紅(キョウ・ユホン)さん、胡偉宏(フ・ウェイホン)さん、現地ガイドの王戦華さんとドライバーの九人である。許宇紅さんは、かつて笹谷さんの会社で働いていた女性で、大阪市立大学から大阪大学大学院に進学したが、今は一時学業を休んで貿易の仕事をしている。近い将来、大学院に戻り、臨床心理学の学位をとりたいと希望しているバイタリティーの固まりのような女性である。お世話になった

笹谷さんに、お返しがしたいと今回の旅のコーディネートをお願いされた。胡偉宏さんは、許宇紅さんのビジネス・パートナーである。夫は黒龍江省の財務を担当する高級官僚であるという。

バスはハルピンから一般道を南に走り吉林

市に向かう。途中の景色は広大なトウモロコシ畑と、その間に水田が点在している。ガイドの王戦華さんの話しによると、農家の屋根を見ると、その農家の人が何族であるかが分かるらしい。漢族の農家の屋根には独特の反りがある。それに対して朝鮮族の屋根は直線である。それに加えてかならずオンドルの煙突があるという。その目で周りの農家を見てみると、大半が朝鮮族の農家であることが分かる。吉林市からは高速道路で延吉方面に向かう。高速道路にはほとんど車が走っていない。齋藤さんが「この高速道路は、日本でなら無料化せよと注文が付けられるだろうな」と冗談を言う。笹谷さんは「これは北朝鮮国境への軍用道路としての役目があるのでしょうか」と答えていた。

午後四時三〇分に安図というインターチェンジで高速道路を出る。ここから二道白河までは、一般道をまだ二時間半走らなければならぬという。やがて周りは真っ暗になった。

六〇〇キロメートルを十一時間かけて走り、午後七時ごろ、ようやく二道白河に到着した。梅棹さんが来た頃には、守備隊の丸太小屋と民家が二軒あっただけという二道白河は、今や人口六万人の大きな町である。

二道白河で夕食をとる。その時、領収書をめぐって食堂の経営者とトラブルがおき、その処理に時間がかかって、結局この日は、長白山の麓のホテルに行くのを取りやめて二道白河で泊まることになった。

二二日、朝六時に出発。一時間ほど走って一般の自動車が行きを許されている最終地点

行程概念図

くことを話した。梅棹さんは、中国側からは自動車で登れるようになっていたことをよくご存知であった。そして一九八四年、吉良達夫さん(大阪市立大学名誉教授)が中国側から登っており、その時の様子を梅棄さんと対談として報告されていることを教えて

まで行く。われわれは出発前、寺本さんから長白山の一〇月平均気温は一・五度という情報を得ていたので、防寒着を用意してきたが、この長白山北門駐車場には、いろいろな店があり、長白山に登る人のために防寒着の貸し出しも行っている。そこからエコ・カーに乗り換えるという。エコ・カーとは名ばかりで、普通のディーゼルエンジンのバスである。多くの乗用車が林道を走ることを制限するために、バスに旅客を乗り合わせさせて輸送するのである。すでに色づきはじめているシラカバの林の中をバスは走ってゆく。

三〇分ほどでまた自動車を乗り換える。これから先は急坂を上るために、四輪駆動車で行くという。ジープタイプの車が、五、六〇台待機している。この自動車に七人から八人づつが相乗りする。道は碎石を敷き詰めた自動車専用道路である。ジープタイプの車はタイヤをきまして、この道を四、五〇キロの速さで突進して行く。運転手の話では、夏の最盛期には一日四〇往復して登山客を運ぶこともあるという。もうこの辺りは森林限界をこえている。

二〇分ほど走ると、頂上から標高にして一〇〇メートルほど下にある駐車場に到着した。そこには大きな服務中心とかけられた山小屋風の建物がある。昨日は氷点下になったというが、いま手もとの温度計では四度である。

駐車場からの登山道には、昨夜の雪がところどころに残っている。天気はこの上ない晴天である。ワンピースの登りで稜線に出る。ここが二六七〇メートルの天文峰とよばれる

頂である。周りは火山性の切り立った岩峰で、眼下には、ほぼ円形のカルデラ湖である天池が青々とした水をたたえている。

この神秘的な光景を見ると、長白山が朝鮮族にとってこの頂きに祖先が天から舞い降りたという建国神話の地であり、満州族にとつても清朝始祖誕生の聖地で、長く立ち入ることの出来ない土地であった理由が分かる気がする。

天池の周りには、ざつと数えても一四、五の岩峰が取り巻いている。その岩峰の急斜面を五〇〇メートルほど下ったところに天池が満々と水をたたえている。この天池からあふれた水は、北の岩峰のあい間から溢れ出して、長白瀑布となり、それが第二松花江の源流となっているのである。

この天池を取り巻く約十一キロメートルの岩峰群を、ぐるりと完全縦走しようとした記録がある。それは飯山達雄の「白頭山と金剛山の岩場」に報告されている（飯山一九八八）。飯山は一九三四年、山仲間とともに火口壁の完全縦走を目指したが、三日目に主峰南壁の登頂を悪天候に阻まれて断念した。一九六二年には中朝辺界条約によって中国と北朝鮮の国境が天池の真ん中を通って確定され、今日ではとてもこのような縦走をすることは出来ない。

南の方向、北朝鮮側には最高点の將軍峰（二七五〇メートル）が見える。將軍峰の東側の稜線には小屋があり、そこからまっすぐに湖面に降りる道が見える。

振り返って北方に目を移すと、そこは見渡

す限りの樹海である。この辺り一帯は中国で唯一、豊富な原生林が残っている地域である。

吉良さんは、梅棹さんとの対談の中で、この長白山の成り立ちと植生について語っている。それによると長白山は今から一〇〇〇年ほど前に大爆発があり、噴煙がたなびいた。長白山の北と西の斜面は風上側であったので、噴出物の影響を受けなかった。そのために、北側、西側にはエゾマツ、トウシラベが見られるという。しかし東側と南側は完全に噴出物に埋もれてしまった。その結果、朝鮮側では、いま生えているのはすべてチョウセンカラマツだけである。この時の噴煙は、日本の東北地方北部や北海道南部にまで達しており、飛来した軽石の中の木炭をカーボン・デイトニングすると、およそ一〇〇〇年前という数値が出て、長白山の噴火と符合するといふ。

またこの長白山の麓の原生林は、かつては金日成が反日ゲリラ活動をした本拠地でもあった。梅棹さんは文章の中では匪賊という言葉で表現しているが、彼がこの原生林に踏み込んだ時、一番注意していたのは、このゲリラとの遭遇であったという。この原生林は、まさに朝鮮民主主義人民共和国の揺籃の地でもある。

天文峰から下山し、駐車場の服務中心に立ち寄り、梅棹さんの研究室で見せてもらった『中国名山 長白山 風光攝影集』を買い求めた。

ここからの帰りもまた四輪駆動車に乗る。その四輪駆動車で下りきった場所から、ふた

たびバスに乗り一五分ほど別の道をたどる。バスの終点から少し歩いた地点で、天池から流れ出した豊かな水が、七〇メートルの滝となつて流れ落ちる長白瀑布を見ることができ。滝の左岸側には登山道があり、この道を行くと天池の湖岸に行けるようだ。この辺りには温泉が湧き出ていてロツジもある。

無事山から下りてひと休みをしていた時、斎藤さんが話し出した。斎藤さんは六〇歳のときチベットにある八〇二七メートルのシヤパンマの登頂に成功している。そのシヤパンマのベースキャンプに日本から八〇歳の老人が観光で訪れたという。その老人は、夜、星空を見るといつてテントの周りを歩き回っていた。医師として斎藤さんは、その老人の身体に異変がおきはないかとハラハラしていたという。その斎藤さんが、いまや八〇歳になったと笑つて話していた。どうしてどうして、斎藤さんはとてもそんな年齢とは思えない元氣さである。

われわれはその日のうちに、四〇〇キロメートルの道を八時間かけて走り、鴨緑江のほとりにある集安の町まで行った。この地には高句麗の広開土王碑や王の墳墓、王都の遺跡がある。高句麗は、広開土王の時に、諸族を制圧して東北地方の大半に支配を及ぼす版図を獲得した。また新羅・百済に進攻していた倭とも接触した。四一四年にこの王の戦績を顕したのがこの碑である。この碑の存在は一八八〇年までは知られることが無かつた。それはこの地方が柳の木の柵で囲われた何人も立ち入ることの出来ない禁断の地であつた

からである。この集安には、二〇九年、高句麗が王都とさだめた国内城や丸都山城などがあり、四二七年、都を平譲に移すまでは、ここが高句麗の中心地であつた。これらを見学した後、清朝が最初に都をおいた瀋陽を経て、九月二五日には関西空港に帰着した。

一〇月一〇日、梅棹さんに長白山の報告に行った。梅棹さんは、「天気は良かったか。私は目が悪くなつてものが見えませんが、あの赤褐色の火口壁と、暗い緑色の天池の色は、いまでもありありと覚えている。あれは悪魔の色や。湖岸に下りたか。私は湖岸に降りたが、その時急に天気が悪くなつて宗徳寺というお寺に逃げ込んだ。そこに二日居た。あのお寺はもうなくなつていらしいな。天池から川が流れ出して滝になつていってる。滝の東側すなわち右岸側を下つていったんや。落石の多いルートやつた。あの川が第二松花江の源流や。その流れにそつて下つていった。一週間かけて二道白河に着いたんや。私が行つた頃の二道白河は守備隊の丸太小屋と民家が二軒あつただけや。今の二道白河が人口六万人とは信じられんな。あそこに行つたのは一九四〇年、もう六十九年も昔のことや。旧制高等学校の学生三人でよく行つたものだと思うな。」と当時を思い出しながら話しをされた。

また国立民族学博物館における朝鮮半島の研究者、朝倉敏夫さんと話をする機会があつた。彼は「中国に住む朝鮮族は、およそ二〇〇万人と言われています。中国にとつ

て北朝鮮の問題は、やはりセンシティブな問題でしょうね。チベットや新疆ウイグルの民族問題と同じ悩みと危険性があるといえるでしょう。中国の朝鮮族は東北地区だけに限らず、最近では上海にまで進出しています。彼らは韓国の人びとも関係を持ち、たいへん大きな商売をしている金持ちも多いということですよ。それがチベットや新疆ウイグルの民族問題との大きな違いといえるでしょう。それとともに、この中国東北には、朝鮮半島の古代史の上での大きな国であつた高句麗や渤海の存在があります。高句麗が鴨緑江の北側、集安を中心にして国をおこし、それが平穰に都を移しました。だから朝鮮半島の人びとからすると、鴨緑江北岸は、わが民族発祥の領土という主張となります。一方、中国から見ると、朝鮮半島は、中国東北部に起こつたツングース族の末裔が建国した高句麗の子孫であり、高句麗は中国の地方政権のひとつであるという主張として現在でも論争しています。今日でも韓国人のびとが中国側から長白山に登り、民族発祥の地として頂上で万歳をしているという話ですよ。」と語つてくれた。

帰国してから『朝鮮名峰 白頭山 金剛山』と『中国名山 長白山 風光攝影集』を見比べてみた。天池を取り巻く岩峰を、一冊は北朝鮮側から北を望み、もう一冊はおもに中国側から南を望んで撮影したこの二冊の写真集は、場所や世代を超えて人びとをめぐり合わせる旅のガイドブックでもあつた。

【参考文献】

飯山達郎 一九八八 「白頭山と金剛山の岩場」『朝鮮名峰 白頭山 金剛山』岩波書店 東京
梅棹忠夫、藤田和夫編 一九九五 『白頭山の青春』朝日新聞社
栗田靖之 一九九〇 「コメント1 未知へ

の情念と合理主義」『梅棹忠夫著作集 第一巻』中央公論社
久保田博二 一九八八 『朝鮮名峰 白頭山 金剛山』岩波書店 東京

孟鐵 著 『中国名山 長白山 風光攝影集』世界華人芸術出版 吉林省 安図県

川田邦夫、横山宏太郎両氏に「雪氷功労賞」

本年五月、社団法人日本雪氷学会北信越支部より両氏に「雪氷功労賞」が与えられた。川田邦夫氏は「雪崩・雪庇、山岳積雪、極域雪氷に関する研究による学術貢献と長年にわたる支部活動への貢献」が、横山宏太郎氏は「長年にわたる冬季降水量の評価及び上越地域の積雪分布の研究と支部活動への貢献」が評価されたもの。ここにその受賞の内容及その人をそれぞれの研究仲間に紹介していただく。

来られました。北海道大学時代に、大雪山や天塩の山中で雪氷研究を開始されたのを皮切りに、富山大学に移られてからは、黒部峡谷の大規模乾雪表層雪崩（通称「ホウ」雪崩）の研究と立山地域での雪氷環境調査研究をメインに活躍されました。

川田邦夫先生（富山大学名誉教授）の紹介

飯田 肇

川田邦夫先生は、雪氷研究者として国内外で数多くのフィールドでの調査研究を行って

特に力を入られたのが、黒部峡谷志合谷での「ホウ」雪崩の研究です。志合谷では、電源開発が盛んだった一九三八（昭和一三）年一月二七日に巨大雪崩が発生して、日本電力の木造四階建て事務所兼宿泊所を襲い、死者三七名、行方不明者四七名という大惨事となりました。被害を受けた建物や樹木は烈いせん断力を受けて破壊され、空間部分は烈しい雪煙による細かな雪粒でしつかり満たされていることが注目されました。黒部峡谷では毎年のようにこの「ホウ」雪崩が発生し大きな被害が起きていますが、「ホウ」雪崩の実態は謎に包まれたままでした。そこで、一九七〇年代から富山大学と北海道大学低温

科学研究所の雪崩観測グループが志合谷を観測地とし、雪崩が通過する真下のトンネルに機器を設置しての観測を開始しました。川田先生はこの観測を中心となって推進し、雪崩の衝撃力、流速、雪崩に伴う風や気圧、気温の変化等を測定して、「ホウ」雪崩の実態を総合的に把握することに成功しました。さらに、雪崩の発生と気象や積雪との関係についても詳しく調べられ大きな成果を上げられました。

また、一九八三～八五年には第二五次南極観測隊越冬隊長としてみずほ基地で越冬され氷床中層掘削七〇〇mを達成、同やまと山脈雪氷調査を行い、内陸調査遠征でドームふじまでのルートを開拓しました。さらに、一九九五～九七年には第三七次南極観測隊副隊長・昭和基地越冬隊長として、ドームふじでの氷床深層掘削二五〇〇m達成を支援されました。この他、カナダ・エルズミア氷帽雪氷調査、ブータンヒマラヤ・チョモラリ偵察トレッキング、グリーンランド・ドームGRIPの雪氷調査、ノルウェー・リグフォーンでの人工雪崩実験、中国・黒竜省、内モンゴルでの雪氷調査、中国・長白山での環境調査等を行い、その足跡は世界中の雪氷圏に広がっています。

最近では、二〇〇〇年三月に発生した北アルプス大日岳山頂部での巨大雪庇崩落事故をきっかけに、巨大雪庇についての研究に着手され、これまで未知だった巨大な吹きだまり型雪庇の形成機構、内部構造について多くの知見が得られました。この調査は、A A C K

の皆さんはじめ多くの山岳関係者と雪氷研究者が合同で行ったものであり、今後の山岳での調査研究の方法論についてあらたな道を切り拓いたものでした。

これらの業績に対して、二〇〇三年に日本雪氷学会北信越支部大沼賞、二〇〇八年に国土交通省雪崩防止功労賞、秩父宮記念山岳賞を受賞しておられます。また、二〇〇九年には長年の雪氷研究についての功績が認められ、日本雪氷学会北信越支部雪氷功労賞を受賞されました。

川田先生のお人柄からか、先生のまわりには山好きの若者がたくさん集まり、その中には雪氷研究者や登山家、山岳ガイド等が誕生しています。

川田先生は、富山大学在任の三七年間に調査・研究で世界を駆け巡られ、文字通り、世界を翔る足で稼ぐ研究者、と言われ、また「自然の声を読み取る達人」という表現が素晴らしく適合する研究者でもあります。

(立山カルデラ砂防博物館学芸課長)

横山宏太郎氏の紹介

佐藤和秀

今春、日本雪氷学会北信越支部より中央農業総合研究センター北陸研究センター・専門員の横山宏太郎氏に「雪氷功労賞」が与えられた。件名は「長年にわたる冬季降水量の評価及び上越地域の積雪分布の研究と支部活動への貢献」で友人として紹介したい。

宏太郎と呼び捨てにするのは抵抗があるが許していただきたい。宏太郎は高田出身、私は小千谷出身の同じ新潟県出身の同郷である。いつから知り合うようになったか定かでないが、京大防災研で私は中島暢太郎先生の災害気候部門、宏太郎は地形土壌部門の学生で賑やかな学生生活を送った。災害気候部門には井上治郎、安成哲三などの面々がいたからである。この四人で京都北部に積雪調査に出かけたことがあった。スキーでは宏太郎が一番、そして私、日頃やりこめられていた越後人はこのときばかりは二人の関西人に優越感を持ったことを覚えていいる。

南極観測隊では雪氷隊員として一四次隊に宏太郎、一五次隊で私が参加した。昭和基地ではなく、南極氷床上で雪氷分野の引き継ぎを行った。一四次隊は大和山脈旅行から帰ったばかりで、櫓の中から残った旅行食の多くをもらった。一五次隊も数千キロの観測調査旅行計画がいくつもあり、食料担当でおおいに助かった。しかし味噌、醤油位しか知らなかった私には、宏太郎から引き継いだレーションには一〇近い香辛料のビン類があつて、どう使つていいのかわからず、まったく参ってしまった。

私は大学では山岳部に入る算段であつたが、父から勘当すると言われて諦めた。が、山つ気のある人に接近していた。そんなわけで治郎さん、宏太郎には山関係の多くの話を聞いてきた。長い大学生活のあと、私が先に新潟県に帰った。北陸農業試験場の沼さん、しばらくして高見さんから「宏太郎はどんな

人物か」と聞かれたことがあつた。これからの雪国にはなくてはならない人材であると答えられた。

そんな期待にこたえて、宏太郎は北陸農試に赴任以来、山地積雪分布の調査を長年続けてきた。すぐに成果が出るわけでもなく、しんどい仕事である。その研究の一部に秩父宮記念山岳賞になった「大日岳巨大雪庇の形成機構に関する研究」がある。さらに降水量の補足率の評価に取り組んできた。特に冬季の降水、雪の補足率は気象、水文、農業、水資源など多くの分野の大問題である。宏太郎は幾冬期も費やし、降水量と風速の間の補足率にある関係を明らかにした。地味な仕事を粘り強く継続してやり遂げる越後人の面目躍如の成果である。地球温暖化と騒がれ、積雪量変動も激しい昨今が続く。二〇年以上の積雪分布データは、貴重な財産であり、さらなる研究が期待されている。

雪氷学会北信越支部活動では、支部理事、幹事長、全国大会実行委員長などを務め、学会本部においても理事・事業委員長、本年度より学会誌「雪氷」の編修委員長として活躍している。このような研究活動と支部活動への貢献に対し、今回の功労賞が授与された。友人として心から祝福したい。

二〇〇九年 秋

(国立長岡工業高等専門学校)

日本山岳協会・山岳共済の担当交代のお知らせ

AACK事務局 吹田啓一郎

日本山岳協会が実施する山岳遭難共済制度への加入をAACKとして取りまとめています。これまで運用に必要な業務を会員の堀内潭様、阪本公一様に委託し、ご協力をいただいてきました。この世話役を十一月一日から、横山宏太郎様と高尾文雄様に交代していただくことになりました。連絡先が左記のように変わりますので、お知らせします。

加入手続きなどの日本山岳協会との連絡担当は横山宏太郎様です。連絡先と会費振込は左記にお願いします。

横山様の連絡先

電子メール：kotaro@affr.go.jp

FAX : 025-524-8216

郵便 : 〒943-0832 上越市本町

2-1-12-801 横山宏太郎宛

保険料・会費の振込口座（申込みと同時に振り込んでください）

銀行 : 第四銀行稲田支店（ダイシギン

コウ イナダシテン）店番号

514

口座番号：普通預金 1241931

名義 : AACK山岳保険 横山宏太郎

（ヨコヤマコウタロウ）

登山計画書の提出先は高尾文雄様です。山

岳共済の適用を受けるには、日帰りハイキング以外のすべての山行で登山計画書を提出する義務があります。できる限りワープロなどで作成したファイルを電子メールに添付して

hutte.rv@topaz.ocn.ne.jp へお送り下さい。できない場合は、左記の自宅へ郵送して下さい。

〒156-0052 東京都世田谷区経堂 5-17-15-104 高尾文雄宛

(Tel/Fax : 03-3439-9262)

堀内様と阪本様にはこの制度の立ち上げのときから献身的に面倒を見てきていただきまして、ありがとうございます。今後とも横山様、高尾様のご協力を得てこの制度が会員登山の安全のための取り組みとしてお役に立つことを願っています。

二〇一〇年度の加入申込みについては、保険料など改定の可能性があります。まだ詳細は確定されていません。詳しいことが分かり次第、AACKのホームページなどお知らせするとともに、次号のニューズレターにも掲載する予定です。

AACK海外登山・探検助成制度の案内

AACK事務局 吹田啓一郎

会員の海外登山や探検的な活動を支援する海外登山・探検助成制度の案内です。応募される方は左記の要領でお申し込み下さい。毎年、三月に採択の審査を行います。来年度の計画で応募される方は二〇一〇年二月末まで

に奮ってご応募ください。なお、運用規程は二〇〇九年三月の改正で助成金額や免責条項が変更されています。

一、申請方法

左記の事項（申請時の予定でよい）を記した会長（上田豊）宛の申請書（A4紙に五枚以内）を作成してください。送り先はAACK事務局長宛に郵送、あるいはPDFを電子メールでお送りください。

867-3 吹田啓一郎宛

または suita@archi.kyoto-u.ac.jp

- (一) 隊または計画の名称
- (二) 申請会員名と連絡先、Eメール等
- (三) 隊の構成（氏名、年齢、所属山岳会）
AACK会員外の参加も認めます
- (四) 対象国・山域・地域
- (五) 概略のルートと日程
- (六) 予算計画
- (七) 隊の特徴などのアピール
（計画の目的・意義と対象地域・活動内容、準備状況、隊員構成の関係など）
- (八) 事故発生時の連絡体制
- (九) 助成金の振込先（銀行名、名義、口座番号等）

二、海外登山・探検助成制度 運用規定

二〇〇五年五月一五日制定
二〇〇九年三月八日改定
第一条 海外登山・探検助成制度（以下、助成と称す）は、バイオニアのないしオリジナ

リテイのある海外登山や探検的活動の助成を目的とする。

第二条 助成の対象は本会会員が主催する計画とし、申請者は本会会員に限る。助成に際しては審査委員会の審議に基づき、理事会が決定する。

第三条 審査委員は理事会で選出する。委員の任期は二年とし、再任を妨げない。

第四条 助成金額は一件一〇万円を下限、年間三〇万円を上限とし、通常は一件二〇万円とする。ただし理事会が認めた場合はこの限りでない。

第五条 助成を行うにあたり、助成対象の隊から、隊の行動ならびに事故について本会は一切責任を負わない旨の免責を得るものとする。申し合わせ事項

一 助成の決定は原則として年一回三月に行い、予算に余裕があれば九月にも行う。

二 助成を申請しようとする者は会長宛に文書により申請し、事後三ヶ月以内に報告書を提出しなければならない。報告書はA A C K ニューズレターならびにホームページに掲載する。

三 一計画につき一申請だけ受け付ける。
四 助成受領時に以下の文書にて免責を得る。

「助成をいただいた計画に関しては、その安全性を含め私共が全ての責任を持って立案及び決定を行ったものであり、隊の行動はもとより、万一事故等があった場合でも、貴会に対し理由の如何を問わず、何らの損害賠償その他の請求をいたしません。」

会員動向

会員異動

編集後記

二年に一度発行される会員名簿が届くたびに、後半に綴られる「物故会員」のページが増えていくのに驚かされる。最新版では名簿の約四〇パーセントを占めている。本誌に「追悼」の記事が登場することも多くなった。なんとも寂しい限りである。元氣な記事が満載できるよう会員諸氏の奮闘を祈るばかりである。

次号の原稿の締切は一月二〇日。

(前田 司)

編集委員

前田 司

発行日 二〇〇九年十一月末日

発行所 京都大学学士山岳会

千六五―八五四〇

京都市西京区京都大学桂

京都大学工学研究科建築学専攻

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一―八

(株)土倉事務所